

就学前の子どもをもつ父親への

インタビュー調査の試み

新道賢一・濱田智崇・川口彰範*

I はじめに

近年、とくに二一世紀を迎えた前後から、子育てにおける父親のあり方が変化してきているのではないだろうか。「父親の子育て参加」などということばがよく聞かれるようになったのも、二〇〇〇年前後である。また、その頃父親による子育て体験を記した出版物が出されるようになった。さらに、「おやじの会」のようなグループが組織されるようになったのも、同じような時期である。

このような中、現在の父親は、一人の個人として子育てをどのように体験しているのか。就学前の子どもを持つ父親インタビューを通して、父親の子育てについての意識のありようを探ってみることにした。ここから、現在の父親の子育てに何が起こっているのかを知り、父親への子育て支援の余地を見出すことができればと考える。

今回報告するのは、本調査を実施するにあたり行なった予備調査についての考察である。子育てにおける父親としての体験のありようと、それを語ることの難しさの一端が垣間見えるで

あろう。この考察をふまえ、本調査への方針を固める足がかりとした。

II 子育てをめぐる社会の状況と甲南大学での研究

1 子育てにおける父親の重要性の再認識

子育てにおける父親のあり方の変化に少なからず影響を与えたものは、一九九〇年のいわゆる「一・五七ショック」である。これは、前年の一九八九年の日本の合計特殊出生率が一・五七を記録したことを指す。それまで戦後最低であった、丙午（ひのえうま）年の一九六六年の記録、一・五八を下回るものであったために、国内に大きな衝撃をもたらした。

以降、政府によって数々の子育て支援政策がとられてきた。一九九四年には、「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」という、いわゆる「エンゼルプラン」と、「緊急保育対策五カ年事業」が策定された¹⁾。一九九九年には「育児をしない男を父とは呼ばない」という厚生省（当時）のポスターが世間を賑わせた。

二〇〇〇年一月からは、児童虐待防止法が施行された。背景には、核家族化と父親の長時間労働によって、子育ての負担が母親のみに集中することになったことへの危惧もあっただろう。

このような動きにあわせるかのように、育児雑誌でも、父親

* 甲南大学大学院人文科学研究科修士課程在籍

に子育て参加を求める特集が見られるようになった。顕著なのは、二〇〇三年から『たまごクラブ』という妊婦を対象とした育児雑誌に『たまごパバクラブ』が、二〇〇五年からは、〇歳から一歳半児を対象とした育児雑誌『ひよこクラブ』には『ひよこパバクラブ』という小冊子附録が、それぞれ年一回封入されている。これは「ママはパパに『もつと赤ちゃんと仲よくなつてほしい』と願ひ、パパは『赤ちゃんどうやって接していいかわかなら』と戸惑うことが多い」⁽²⁾ことから作られたものだという。表紙には「赤ちゃんともつと仲よくなつてね!」というキャッチコピーがつけられ、父親と子どもの距離を近づけようとする意図が窺える。

上記と同時に、男女共同参画社会の実現を目指す動きも見逃せない。「二・五七ショック」と時期を前後して、一九八五年に男女雇用機会均等法が、また一九九一年には男女ともに育児休暇を取ることができる育児休業法が成立した。さらに、育児を行う労働者の仕事と家庭との両立をより一層推進するために、育児・介護休業法が改正され、二〇〇五年四月から施行されている。

以上のように、少子化対策、虐待の防止、男女共同参画社会の実現、という三つの側面から、父親の子育て参加が、いわば上からの施策として求められてきたといえる。

一方で、父親の側からも、子育てに関与したい、というようない動きもみられる。たとえば、太田(一九九二)⁽³⁾、脇田ほか(二〇〇〇)⁽⁴⁾、山田(二〇〇六)⁽⁵⁾など、父親による子育ての記録が出版されるようになってきた。テレビ番組でも、

二〇〇七年からNHK教育テレビで、父親と子どものかかわりを短いドキュメンタリー風にまとめた『パパザウルス』が放映されている。一九九〇年代のバブル崩壊から、いわゆる失われた一〇年を経て、男性、父親のライフスタイルも徐々に変化してきているといえるかもしれない。「おやじの会」という、保育所、幼稚園、小学校などに通所・通学する子どもを持つ父親によって組織される会が草の根的に広がりをもせたのも、二〇〇〇年前後であるらしい。

2 甲南大学における子育て研究

そのような中、甲南大学では二〇〇〇年に「子育て環境と子どもに対する意識調査」が行なわれた。これは、阪神間およびその周辺に在住する乳幼児を子育て中の母親およびその家族に対する、質問紙による意識調査である。同方法による調査は、二〇〇一年に父親版が、二〇〇二年には祖母版もなされた。

ちなみに、二〇〇二年の父親版の結果によれば、「父親があまり子育てに参加できていない現状」があり、しかし「現状に満足せず、もつと子育てに関わりたいと思っている父親が多くいる」ものの、「家族や子どもに対するイメージが、非常にポジティブではあるが具体性に欠ける」ところがあるという⁽⁶⁾。

最初の調査から六年後にあたる二〇〇六年、「第二期子育て研究会」によって「第二回」子育て環境と子どもに対する意識調査」が行なわれた。この調査の回答者の中から協力者を募り、子育て中の母親に対するインタビュー調査が実施された。インタビューからは、幼稚園児の母親と保育所児の母親では、父親

に期待しているものが異なっていることが示唆された⁷⁾。前者は「いざ」といふときの「後ろ盾」としての父親像を期待しているのに対し、後者は「日常的共同養育者」としての役割を期待する傾向があった。いずれにしても、母親は父親に対して、子育て上何らかの役割を期待していることが改めて浮き彫りになった。今回の就学前の子どもを持つ父親に対するインタビュー調査は、この母親からの期待を、父親側がどのように感じ取っているのかを検証する意味も含まれている。それを含め、現在の就学前の子どもを持つ父親は、子育てをどのようなものにとらえ、どのようなにかかわり（もしくは、かかわらず）、どのような体験をしているのであろうか。父親の生の声を聞くことを目的としている。

III 調査方法

本格的な父親インタビューに入る前に、八名の父親への予備インタビュー（半構造化面接）を実施した。実施の要領は、以下の通りである。

調査期間／二〇〇七年七月～一〇月

調査場所／甲南大学心理臨床カウンセリングルーム内の面接室

調査対象／就学前の子どもをもつ父親八名

調査方法／一時間から一時間半程度の半構造化面接

インタビューでの調査項目は、以下の七点である。

①はじめに

- ②インタビューへの動機付けの確認
- ③普段の様子
- ④子どもの誕生、成長をめぐる
- ⑤子育て上の悩み・不満
- ⑥子育てで父親にしかできないと思うこと／母親にしかできないと思うこと
- ⑦インタビューの感想

これらの項目は、父親の子育てについての現状を明らかにするような語りを引き出すことを目論んで作られたものである。現在の様子を聞いた上で、子どもが誕生する以前から現在までを聞き、そのなかでの悩みや不満にも触れながら、最後に父親とはどのようなものであるかを尋ねる、という流れで話を聞いてみることにした。時間的に近く、体験として具体的なところから、時間的にも遠く、抽象的な話へ至る方が、その逆よりも語りやすいのではないかと考えてのことである。

IV 結果

前章の手続きを経て、八名分の父親の語りが集められた。八名の概要は、表の通りである。

インタビュー内容の分析にあたって、八名の録音データを文字起こしした上で、本論の筆者らにより詳細に検討した。

興味深いことに、筆者らにとつて強く印象に残った語りと、そうでない語りがあることに気づいた。しかも、前者はAさん

協力者	A	B	C	D	E	F	G	H
協力者の年代	30代	30代	40代	30代	30代	30代	40代	30代
子どもの数	2	1	1	2	3	2	2	1
子どもの年齢性別	5歳男 1歳女	3歳男	3歳女	3歳男 11ヶ月女	6歳男 2歳女 5ヶ月女	5歳女 4歳男	10歳男 4歳男	1歳男

表 インタビュー協力者の基礎データ

のもののみであり、後者はその他すべてとなった。この違いはどこからきたものであろうか。筆者らは、合議して検討を重ねた。結果、次のような仮説をもつに至った。Aさんの語りのなかには、抽象的で一般化されていない、主観的ゆえに個人的な、Aさん自身の生きざまにもかかわるような、いわば「生の体験」が刻み込まれているような印象を受けたため、筆者らの印象に残ったのではないか、ということなのである。

だとすると、他の協力者の語りには、「生の体験」はなかったのか。また、そもそも「生の体験」とはいかなるものか。以下、Aさんの語りについて、詳細に考察を加えることで、これらについて明らかにしてゆく。

(Aさんの概要)

三〇代男性、二児の父である。同居家族は、いわゆる専業主婦

の妻(三〇代)と、幼稚園年中、五歳の長男と一歳の次男。家族の状況は、以下の通り。Aさんは一般企業に勤めるサラリーマンで、休日は毎週日曜日と月二回土曜日。仕事からの帰宅時間は午後八時頃で、普段子どもと接する時間は平日で一〜二時間といったところ。現在、次男が家じゅうを動き回り、何でも口に入れるので、目が離せないことが大変だという。また、次男は母親べったりなので、母親のストレスが高まっているところも気になるという。

V 考察 その一 Aさんの体験という側面から

インタビューの流れに沿って語りの内容を吟味していくことで、Aさんの体験について検討を加えてゆくことにする。

まず、後の語りとの比較のために、インタビュー開始二五分ごろの語りから見えていく。調査項目④の「子どもの誕生、成長をめぐる」の内容に入っている段階である。Aさんは、インタビューに、子どもが歩き始めたころ、話し始めたころの様子を尋ねられて、最近はその子が歩き回るようになり、鳩の糞を口に入れたり、一人で滑り台に上っていったりと、なかなか目が離せない、という話をされている。活発に動き回る子どもの様子を聞いた後、インタビュアーが、「そのような子どもさんとの関わりの中で、Aさんご自身についてはどうですか、子ども好きだな、とか(思われますか)」と、Aさん自身の内面についての発話を促すと、「以前は子ども好きだと思っていたが、自分の子どもを持つてみるとそこまでではないというのが分かっ

た」と言われ、次のように語られた。以下、語りの引用部分では、「」はAさんの発話、「〔 〕」はインタビュアーの発話である。

「根っから子ども好きの人はみんな一緒に、子どもと一緒になってるなっていう気はするんですよ。遊んでる姿とか、面倒見てる姿見ると。自分そこまでなっていないっていうのがあって」

「一緒になってる感じ?」

「目線が一緒なんですよね、やっぱり遊んでるときの。どうしても親として遊んでる感覚は、の違いがあるなっていうのがあって」

(中略…一緒に遊んでいて上の子が下の子を弾みで押ししてしまったりしても、その場面を目撃するとただの弾みと思えず「あかんやないか」と言ってしまう。上の子だけのときでも、喫茶店で落ち着きがなかったりすると「座り!」と言ってしまい、親の目線になってしまふ)

「んー、そのへんが、まあ言わない人もいるんじゃないかなっていうのが」

「そうですね、受け止められる人もいるんじゃないかなっていう。言うときは言いはるんやろうけども、そういう場っていうか、役割的なものというのか。うん、そのへんがまだ切り替え上手いこといってないですね。だから、そこまで子ども好きじゃないかなあとかね、そっちに繋がるのかどうかかわからないですけど」

「どうなんでしょうね」

「でも、ほんとに好きっていう人はやっぱり一緒にあってほん」とことん楽しんでるなって思えますからね」

「子ども好きか」と問われて考えてみたとき、子どもに対して親の目線で関わる自分の様子がAさんの意識に上ってきている。公園や喫茶店での他の親が「子どもと一緒に目線」になって楽しんでるのと比べると、自分はそうなりきれない所がある。普段の関わりを全体として振り返って見たときには、Aさんは自分のことを「子どもと一緒になる」ことが苦手な親として認識しているようである。この少し後、インタビュアーの「ちょっと一緒になってるな、と感じるときもありますか。いつもなにかちょっと上から見ると、注意しながら見るとかなって感じになりますか。」という問いに、Aさんは、「どちらかと言うと後者でしょうね、そっちでしょうね、うん」と答えている。

しかし、引き続きいての子どもの誕生、成長をめぐるの語りの中で、次のようなエピソードが語られた。インタビュー開始から四〇分程度経過している段階で、寝かしつけの際に絵本の読み聞かせをしているという話から、どんな絵本がすきか、という話題に入っている。ここでは、Aさんが子どもと一緒に絵本の世界を楽しんでいる様子が伺われる。

「お子さんがこう好きな本、これが好きとかいうのはありますか? 決まっている感じですか?」

「時代に、流れ、年齢によって変わってきますね、はい。」

「何種類か、こう、読まれている中で、お父さん自身がこれが

「いいなと思われたり、そういうのはどうですかね？」

「あー、ありますね。うん、これええなっていうのはありますね。僕が、僕自身がまだちっさい時に読んだ絵本とかがまだあるんですよ。ロングセラーみたいな。あっこれ読んだわとか思いながら、なんか記憶が甦るっていうんですかね、そういう本もやっぱりあるんで、あーっていうのは。」

「うーん、それは、えーっと、なんかタイトル」「ぐりとぐらシリーズとかですかね。」

「そうですね、あれはもう、昔からありますね。」

「あと、ともだちなんやっただけ、タイトル忘れたな。あの、うさぎがなんか野菜1つ、2つ拾ったから1つは友達にあげようというて、それが最後に戻ってくるっていうあの本も自分がなんか読んだ記憶があったりとか。」

「あー、そうなんです。ちよっとお父さんがいいなとか、気に入っているようなお話が、それはお子さんもどうですか。一致しますか。あんまりしらないですか。」

「一致しないとき、もありますね。だけど、どうなんやろ、一致してるのか一致してないのか、ちよっとするっていう感覚で見ただ憶えはあまりないですけどね。」

子どもと絵本を読んでいるとき、甦ってきたAさん自身の子どもの頃の記憶が、今の我が子との体験と重なって、「あーっ」と思う。このときおそらくAさんは、ぐりとぐらが一緒に大きなカステラを作ったり、うさぎが友達のことを思って少ない食べ物に分けてあげたりという、あたたかでポジティブなテーマ

のお話を素直に「いいな」と楽しめるような、無邪気で子どもらしい意識のあり方の中へ、子どもとともに身をおいているものと思われる。インタビューは、「父親が気に入っている話は、子どもと一致するか」と問う形で「父親」と「子ども」の二人がそこにいて、一つの絵本をそれぞれが見ている」という構図を提示しているが、Aさんはそれに対して一旦は「一致しないときもありますね」と返答したものの、「だけど、どうなんやろ」と立ち止まり、「一致しているのか一致してないのか」というような「感覚で見た憶えはあまりない」と振り返っている。

読み聞かせの場面では、親はお話を読んであげることで、子どもを絵本の中に広げる世界へといざない、それと同時に、親自身も子どもの存在によってその物語の中へといざなわれる。Aさんが「ぐりとぐら」のお話を「これええな」と思えるのは、その世界をともに体験する子どもの存在があればこそであろう。このとき、子どもが親の手で広げられた絵本に描かれた絵を見つめながら、親の語る声を通してそこで物語が展開していくことを体験するという点で、親は子どもと物語との間を媒介し、その世界を創り出す創り手となり、その世界の一部分となっていると同時に、自身もその世界を体験し、そこに身を置く存在となっている。その世界が子どもにとつても親にとつても心地よいものであり、その物語を素直に受けいれることを肯定的に体験しているときには、そこで「子ども」と「自分」のあり方が「一致しているのか一致してないのか」というような、「子ども」と「自分」とを分けていく感覚は生じてこない。「ぐりとぐら」を読み聞かせるAさんは、子どもと自分が「一致しない」でも「一致する」

でもなく、一致するとかしないとかいう意識そのものが立ち上がってくる以前の、「子ども」と「自分」とが渾然となるような感覚の中にあつたのではなからうか。

そして、この「一致してるのか、一致してないのか」ということを巡って、Aさんの語りは次のように展開していく。

「あーなるほど。そうですね、まあなんかちよつとね、昔の自分が読んでたのを思い出したり、ありますよね。」

「はい。まあ、うん、ですね。あと、まあ、親としてはこういうのは、と思うときもありますけど、子どもはどう思ってるのか、とかな、とかね。なんか、小鳥が死んじゃうとかいう物語とかもあつたり。それでそういうー、死つてどうい風になるんだよつていうのも、伝えたいとは思うんですけど、その物語でそれをどう、本人が、死んじやったらどうなるのか、そういうところはこういう風に捉えているのか、とかね。どう答えていいんやろとか、逆に聞かれたときにとか、そういうのはちよつと大人としての考えなんかもしれないですけど、ありますよね。楽しい本ばかりじゃないんで、そういうシリーズになるとやつぱり。」

「そうですね。なんかやつぱり、テーマを持った絵本というかな。」

「そういうなんか、テーマみたいなものはやつぱり、えーどうでしょうね、なんか子どもさんに、うまく言葉にならないで

すが、わかってもらいたいのとはちよつと違うんですけど、ちよつとこういうテーマを伝えてあげたいな、とかいう思いもありますか。どうですかね。」

「大人の、親としてというか、大人のにはそらありますよね。」
「子どもはどう思つて読んでるのかな」と思う場面として、Aさんは「小鳥が死んでしまう物語」を読んだときのことをとりあげる。「死」ということについて子どもはどう思っているのか、親はどう答えたらいのか。「楽しいばかりではない」、辛い、悲しい、寂しい、あるいは、怖い、恐ろしいこと。その最たるものが「死」であろう。

小鳥が死ぬ物語を子どもはどう思うだろうか、子どもに何か聞かれたらどう答えればよいだろうかと考えることを通じて、Aさん自身が「死」をどう捉えるのか、という問題に向き合うことになる。「ぐりとぐら」の世界と異なり、ただ素直に受け入れて「いいな」と思う、というかたちで無邪気に関わることのできない「死」の物語。絵本の世界で「こういうのは」と思うようなテーマが展開したとき、「親として」のAさんの視点が立ち上がるといふかたちで「子ども」と「自分」との間に一致しないものが生じ、「動物飼つたらこういふことになるんだよ」というように、子どもに何かを言い聞かせたくなるような意識が動き始める。このときAさんの意識は、絵本の世界で展開される物語を展開されるままに体験するあり方から抜け出し、自身が無邪気に身を置くことのできなくなった世界に対して、子どもに何かを言つて聞かせようとしたり、子どもに何かを聞かれたときの答えを用意しようとしたりする、というやり方で

関わろうとすることになる。Aさん自身もそのような動きを、どこか子どもから離れたものとして感じとっているらしく、「大人としての考えなんかもしれないですけど」と語っている。それでも、それに続けて「楽しい本ばかりじゃないんで、そういうシリーズになるとやっぱり」と言い、「死」に代表されるような何かに向き合うことを、子どもに伝えるというかたちで、子どもと自分の関わりの中で志向しようとする感覚を持ち続けているようである。

インタビュアーはこの後、もう少しこの志向のあり方について聞いてみたいと思い、読み聞かせ以外の場面で同じような経験があるかを尋ねている。

「大人のにはある感じですかね。そういう場面って、まあ絵本だと絵本の中にそういうテーマが出てきたりってあると思うんですけど、えーどうでしょうね、5歳ぐらいたと、ちょっとこう、会話ができるじゃないですか。そういう普段のこう、会話の中で何かそういうものを伝えたりってこういう場面はありますかね?」

「まあ、時々ありますね。だから、電車好きなんで電車の脱線事故なんか、それこそ尼の、あの時は電車大好きなんで、何でもこうなんのついでというのは、もう4歳ぐらいたったんですけど、4歳なる年くらいやったんですけど、なんで電車こんななったの、スピード出し過ぎたからだよって、スピードつてなあと、ていうような。で、なんで電車ってこんなことになるの、とか、というのは、それはちょっと印象的に残ってま

すね、で、ずーっと見てましたね。」

「あー、だいぶわかるんですね。」

「で、なんか怪我してる、なんか痛い人がいるとか、大丈夫なかなみたいのは思ってたみたいですけど。なんか複雑やったんかも知れないですね、電車がずつと好きでプラレールずつと集めてて大好きなのが、ぐちゃぐちゃに潰れてる、のを見たつてというのが。で、帰ったらその説明を全部、こうなつてこうなつて一両目が二両目がとかいいう、全部説明してくれたりしてたんで。」

「あっお子さんが。」

「はい。」

「あっそうなんですか。」

(Aさんの長男は二〇〇七年九月のインタビュアー実施時に五歳なので、二〇〇五年四月のJR福知山線の事故当時は二歳か三歳である。インタビュアー内容の他の部分との整合性を考えると、二歳九ヶ月から三歳ちょうど頃のエピソードであろう。)

ここで語られたエピソードは、インタビュアーにとつても非常に印象深いものとなった。

一〇七名の死者を出したJR福知山線の脱線事故。マンションに衝突し、原形をとどめないほどにつぶれた車両、次々に救急車で運ばれる人。混乱した現場の状況が何度もテレビに映され、死傷者の名前が刻々と報じられる。事故の発生状況の再現CGが作成され、マンションに向かって激突していく列車の様

子までもが、繰り返し映像として流される。

「なんで電車こんなになったの」「スピード出し過ぎたからだよ」「スピードってなあに」、というやり取りは、平時の子どもとの会話とはいくらか異質なものとして、Aさんの印象に残っているようである。電車は、車や飛行機などならんで、幼児期から児童期の男児が、特に好きなものの一つである。大勢の人を乗せてどこまでも続くレールの上を力強く走る電車、大きくて頑丈で居心地の良い車両の内側から窓の外を流れる景色を眺めている間に目的地へと自分を運んでいってくれる電車は、自己のイメージを託す対象になっていると考えられる。家族との外出で乗る電車、いつも遊んでいるプラレール。事故を目撃する前の、この子にとつての電車にまつわるイメージはおそらく、全く肯定的な、良い対象としてのそれであつたであろう。その電車がぐちゃぐちゃに潰れ、その電車に乗っていたがために大勢の人が負傷しているという現実を目の当たりにした体験が子どもに与えたインパクトを感じとつたAさんは、当時の子どもの様子を「なんか複雑やつたんかも知れないですね」と振り返り、帰宅したAさんに事故の状況を事細かく説明する姿、ニュースにじつと見入っている姿を思い出している。事故の情報を延々と映し出すテレビ画面から感じられるただならぬ雰囲気、キャスターやコメントの怒りや悲しみのこもつた声、傷ついた人たちの痛み。大好きな電車によつてもたらされた、あらがひようのない、破壊的・否定的な出来事を目撃した子どもが発する「なんで電車こんなになったの」という問いは、河合⁷⁾のいう、「知的なものも情動的なものも含むもの」として

の「なぜ」(Why)の問いであつたと考えられる。「なぜ」の問いに答えることができないとき、私たちはそれを「いかに」(How)の問いに変えることで答えようとする。「スピード出し過ぎたからだよ」というAさんの答えも、「一両目が、二両目が」というテレビから流れる情報も、電車が「いかに」潰れるに至つたのかという説明であつて、「なぜ」の問いに本質的に答えることはできない。「なぜ」の問いを發した子どもの情動的な高まりが、親が「いかに」という答で応じてあげることでも静まりきらないとき、繰り返し「なぜ」の問いが發せられることになる。Aさんは、子どもに「なんで電車こんなになったの」と繰り返し聞かれる様子を再現している。また、子どもが「一両目が、二両目が」と、ニュースで聞いた「いかに」の答えをAさんに伝えるというかたちで繰り返すことは、自らの情動の高まりへの対処になつていると同時に、その高まりをAさんに伝える行動となつていると考えられる。ここで、子どもが事故の様子を「いかに」伝えようとしたかという説明を繰り返すAさんの語りは、子どもの内面で高まる何らかの動きを感じ取る体験が、Aさん自身に強いインパクトを与えたことを伺わせる。そのインパクトは、今ここで語ることでAさんの中に甦り、再び体験されていくかのようである。

「一両目はマンシヨンの下に入ったみたいでとかなんか、そんないじ、ニュースのあれをそのまま、下に入ってるんだよ、みたいな、へーみたいな。なんか凄く集中して聞いてるんやろなと思つて、やつぱりそこは不思議や」

「そうですね、へー。」

(10秒沈黙)

「いやーちょっとびっくりですね。」

「不思議ー、いや不思議なんですけど、やっぱり。」

「すごいなっていう感じがしますね。」

「うんー、なん、何なんかはちょっと分からないですけど、そういう好きな電車、普段乗る、電車乗るのも見るのも好きで、それがあっていう、ああなってるっていうのはものすごい受け、なんか、知りたいっていうのがあったんかなあみたい。多分今はどう言えないと思うんですよ。その瞬間はそれはあった、と思う。」

凄く集中力でニュースに聞き入り、自分にその説明をしている子どもの姿から受けたインパクトを、Aさんは「不思議や」という言葉で表現する。インタビュアーも、事故をめぐってAさんと子どもとに体験された出来事に、言葉にしがたい何かを感じて「へー」と感嘆するが、Aさんとともに暫し沈黙してしまふ。その後、インタビュアーは自らの「感じ」に「驚き」というかたちを与えて「びっくりですね」と声に出している。続く「不思議ー、いや不思議なんですけど」、「何なんかはちょっとわからない」という語りからは、Aさんも言葉では捉えがたい何かを体験していることが伺われる。そのときの子どももありようを、Aさんは辛うじて「なんか、知りたいっていうのがあったんかなあみたい」と言葉にするが、それは、「多分今はどう言えない」、「その瞬間」にはあった「それ」としか表現しよう

のないものである。

言うまでもないが、ここでAさんが「知りたいっていうのがあった」という言葉で指し示そうとしている、この子どもが「知りたい」という内容は、例えば「スピードを出し過ぎてカーブを曲がり切れなかった」とか、「ダイヤの遅れをとりもどすために無理な運転をしていた」というような、物理的・客観的なレベルのものではない。そのような「いかに」という説明を欲しているのであれば、むしろ言語的理解が発達した今の方がはつきりと「言える」はずであろう。この子どもがテレビに映された事故現場で多数の死者が出たことまで理解したかどうかは分からないし、Aさんとの会話の中で「死」という言葉は使われなかったようであるけれども、彼はこの「電車の脱線事故」を単に物理的・客観的な出来事として見知ったのではなく、これまで彼が(彼を)培ってきた、「好きな電車」というイメージ(あるいは対象)の、(少なくとも部分的な)「破壊・死」として、また、「好きな電車」によってもたらされた「破壊・死」として体験していると考えられる。「なんでこうなるの」という彼の問いは、突き詰めれば「なぜ大事な存在が壊れ・死んで(壊し・殺して)しまうのか」という問いへと通底するものであるといつて過言ではないであろう。Aさんにとって、「乗るのも見るのも好きな電車」が「どうしてこうなるのか」と問いかげられることは、それとはつきり言語化するようなかたちで意識してはいないものの、どこかで、「死」とは何なのか、それにどう向き合えばよいのか、と問いかげられることとして体験されたものと思われる。情動的なものの高まりから目をそらすことも、それ

を「いかに」の答えの中に解消してしまふこともなく、「なぜ」の問いの中にとどまり続けて繰り返し問いかけてくる子どもは、その瞬間、「死」のテーマに自らが向き合い、また同時にAさんをそれに向き合わせようと働きかけてくる。「主体」として、Aさんの前に立ち現れていたのではなからうか。「不思議や」という思いを抱きながら、ニュースをじっと集中して聞いている子どもを見つめ、その問いかけに答えようとするAさんは、そのとき、「死」というものをどう捉えるのかという問題に向き合うことを迫られる世界の中に、子どもとともに身をおく体験をしていたものと考えられよう。

「電車好き、電車のオモチャとか遊んでたりっていうのは、なんか様子が変わったりました？その前と後で、特にないですか？」

「いやーそれはそんなにはないですね。ただ、知ってこかしらしてたら、あんな風なるん嫌やろっていう風にこつちが押し付けて言ってた事があったかなっていう、僕自身も、あの事故、尼のあの事故の後ブラレール敷いて、知ってこう、こかしらとかしたときに、あんななったら嫌やろこの電車が言うて、嫌や、みたいなのは、そういう会話はありましたけどね。ちゃんと電車は線路の上走るんが正しいんやんなあ、言うて。」

「あーそういうことがあったんですね。」
「ありましたね。けど電車は未だに好きなんで、まあまあ、あれなんでしようけどね。それで様子が変わったっていうとこ

ろは特にはあれなんですけどね。」

「あーなるほど。」

「まあ本も電車の本ばかりですね、本人が欲しいって言うのは電車の本がやつぱり。」

「あーそうなんですか、へー。」

「まあ、こつちが、は、こういう本と思うときはありますけど、まあまあそれはあれかなと。」

その後、子どもがブラレールの電車を「知ってこかす」のを見て、Aさんがそれが脱線事故の再現であることを察し、「あんな風なるん嫌やろ」と電車をレールの上に戻す、という場面が語られる。Aさんがはじめ、「こつちが押しつけて言ってた」と表現するその言葉は、子どもとは離れた、「親としての」視点から発せられたものであるように感じられ、Aさんは、一旦は「電車がこける」世界からいくらか身を引いた立場からそこに関わろうとしたように思われる。しかし、続けてAさんは「僕自身も、あの事故、尼のあの事故の後ブラレール敷いて、知ってこう、こかしらとかしたときに、あんななったら嫌やろこの電車が言うて、嫌や、みたいなのは」と語る。ここでのAさんの体験は、おそらく、電車をこかした「子ども」に、「Aさん」が「あんななったら嫌やろ」と言い、それに「子ども」が「嫌や」と答える、という風に客観的に了解されるようなものではない。電車をこかし、「あんななったら嫌やろ」と言い、「嫌や」と答える、というやりとりは、子どもとAさんとがともに「レールを敷く」ことで創り出した世界で展開された物語であって、それは子ども

もの物語であると同時にAさん自身の物語でもあったと思われる。「電車がこける」世界をはじめは「子ども」のものと感じていたAさんも、それが何度か繰り返されるうちに「僕自身」のこととしてそこに関わることになったのではなからうか。子どもとAさんがともに創り出す世界の中で、「こけた電車」を「線路の上」に戻す体験は、Aさんと子どものそれぞれにとって意味深いものとなっていると考えられる。

読み聞かせからJR脱線事故をめぐる子どもとのやりとりについての語りを詳細に分析することで、Aさんが、「子ども」と「自分」のありようが「一致するかしないか」ということ自体が問題となる以前の、子どもと自分が渾然となるような体験、「死」というテーマをめぐる「子ども」と「自分」との間に不連続なものが生じ、「子ども」に何かを伝えたくなる体験、またその「子ども」から働きかけられることで「死」をめぐる物語の中へ子どもとともに身をおく体験をされていることが見えてきた。子どもと接する日常の中で「自分」という感覚のありかたが変わり、「死や破壊」といった人間が生きていくうえで避けて通ることのできない問題に取り組むこととなったこの体験は、非常に個人的・プライベートな体験であるとともに、人間にとって普遍的なテーマへと通じていくものである。それは、一般的な言葉では整理しづらい、非常に語りにくいものであって、体験した瞬間の印象が深かったとしても、普段は心の片隅、無意識の中へとしまいこまれているものであると思われる。

Aさんは始め、「子ども好きの人は根っから子どもと一緒になっている」「自分はそこまでなっていない」と、「子どもの目

線」からものごとを見ることへの苦手意識を語られていた。実際、絵本からJR事故の話題に入るより前のインタビュ前半部分では、子育てをめぐる出来事をいわば「親の目線」から語られているようであった。それは内容として整理され、一般的に子育ての中で起こる出来事として理解できるもので、Aさん以外の協力者の語りと同様、特に筆者らに強い印象を与えるものではなかった。JR事故をめぐる体験は、読み聞かせの際の「自分」の感覚を思い出したことがきっかけとなって蘇ってきたものと思われるが、Aさんは整理できずにしまいこまれていた体験を、今この場で言葉をつむいでいくことでなんとか表現しようとする力して下さった。その「生の体験の語り」が筆者らに強い印象を与えることとなったものと考えられる。

このような、筆者らに強く印象づけられるような語りが得られたのは、今回インタビュを行った八名中、Aさん一名のみであったが、この「生の体験」はAさんに特有で、他の七名には体験されていないものなのであろうか。先にも触れたように、このような「生の体験」の背後には人間にとって普遍的なテーマが含まれていることを考えれば、他の父親も同じような体験を持つことがあるものと思われる。その一方で、この「体験そのもの」は、その中で「自分」のありようが揺さぶられる、非常に個人的でプライベートな出来事でもある。この、「生の体験」のもつ性質や、そのような体験に対する語り手の構えが、インタビュの場でのこの種の体験の語られにくさと関係していると考えられる。父親が子育てに主体的に関わるといことは、子育てをめぐる生じる個人的でプライベートな体験の中に身

をおくということでもある。子育てを考えるとき、このような「生の体験」がどのようになされているのか、ということに目を向けておくことは重要であると思われる。今後の調査へ向け、この「生の体験」の語りにくさ、父親をその語りから遠ざけているものについて、以下で考察したい。

VI 考察 その二 ～男性が子育てを語る難しさ～

1 男性の語り

男性は自分自身について「語る」ことが苦手な人が多い。

これは筆者が、男性向け相談窓口でこれまで男性の悩みを聞いてきて受けた印象である⁽⁸⁾。体験を思い出しながら、あるいは感情に注目しながら、自分自身について語るといのは、多くの男性にとつて、簡単なことではないようである。

男性の相談においては、本題に入る前の能書きとでも言うべきか、前置きが長くなることが多い⁽⁹⁾。「くだらないことなんですけど」「どんな小さな悩みでも聞いてくれますか」等々。本題に入る前にいろいろな言葉を並べ、すぐに語り始められない。この背景には、男性のこころの中で動いているであろう、いくつかの要素が考えられる。

ひとつは、男性が自分を評価されることを恐れているということである。個人の悩みは、その個人にとつて重要なこと、だからこそ何とか解決したいこと、なのであって、「くだらない」かどうかという物差しで他と比較し、評価を下すようなものではないはずである。しかし、多くの男性の頭の中には、言わば

「立派な」「大きな」悩みと「くだらない」「小さな」悩みがイメーজされている。「悩み」とは本来こうあるべきである、という何が想定されているようである。そして本来あるべき「立派な」悩みにはほど遠い「くだらない」悩みを抱えて苦しんでいる自分は「人間としての評価が低い」ために「恥ずかしくお話しづらい」という発想があるように感じる。何らかの「形」があつて社会的な評価も定まっているものについてであれば、男性は安心して話せるのであるが、そうではないものを自分が表現することには、不安を感じる傾向が強いようである。

また、男性はプライベートは語るべきではない、あるいはそれを何らかの形で表現するのであれば、内容を選別し、洗練してからにするべきであるといった概念に縛られている場合がある。男性にとつて他人に話すということはいわばオフィシャルなことであり、十分に準備して理路整然とプレゼンテーションすべきことなのであろう。一方で悩みや感情といったものは、そもそもはっきりと定義された言葉では表現しにくいものであり、そんな「はっきりしないもの」「曖昧なもの」は他人に見せるべきものではないという縛りがあるように思える。そして、ここにも「評価」の物差しが当てられている。オフィシャルなプレゼンテーションは社会的に評価の対象となるがゆえに、価値のあるものであるのに対し、個人的な体験や感情の語りは、社会的には必ずしも評価されず、よって価値がないもの、として認識されやすい。

実際に、悩みを話したくて相談に來ている（あるいは電話をかけて來ている）のにもかかわらず「お話しするようなことで

はない」「人様にお見せできないようなことなので」といった表現をする人がいる。相談内容に触れていたとしても、個人的な体験や感情には触れないようにして、外的状況だけを淡々と報告し、「このような場合は、一般に皆さんどうしておられるのでしょうか」と画一的な解決方法のみを尋ねてくる場合もある。外的状況だけでは話が収まらず、個人的な内容にまで踏み込んで語った場合には「こんなことで悩んでいる人は他に誰もいないですよ」「すみません。こんなことを話してしまつて」「私つて変なのでしょうか」となつてしまう。

さらに、悩みの内容そのものが、社会的な「男らしさ」に縛られているが故に生じていることも多い。男性は、生育歴の中で「強く」「たくましく」あるべきという社会的な刷り込みがなされることが多い。社会の中で勝ち上がつて行くこと、社会的に価値を認められるものこそが重要なのだという（暗黙のものも含めた）メッセージは、男の子の成長プロセスに、現代でもあふれている。そうして得てきた「こうあるべき」「こうでなければならぬ」という思いこみはなかなか変えることができない。そしてその「こうあるべき」理想の自己像と、現実の自分の間のギャップに悩み、苦しむケースは多い。

いづれにしても、男性が「語る」ことには社会的な「男らしさ」の縛りが、大きな作用を及ぼしていることが推察できる。父親インタビューについても、ある程度同じことが言えるのではないだろうか。「悩み」のように自分の弱みを直接さらけ出す訳ではないが、「子育て」は本来非常にプライベートな内容であると同時に、社会的に評価の対象としても想定されやすいと思われ

るからである。今回のインタビューへの協力をお願いする際も「父親失格と言われそうで」と抵抗する男性に何人か出会った。てかどうかわからないので」とか「私のしていることが子育てわれわれとしては「普段の子育ての様子（その男性自身が普段体験していること）を聴かせてください」とお願いしているのにもかかわらず、男性達は非常に身構えてしまつている。前者は「父親として評価されるのではないか」という不安をかきたてられ、後者は「子育てたるもの」が何かオフィシャルなものとして想定されていて、それと適合するようなことを自分ではないし、そんなプライベートなことは人様にお聞かせすることではない、と考えているのではないだろうか。インタビューを直接お願いして断われた例は数として多くはないが、こうした反応をする男性は、一般には多いと思われる。やはり男性が子育てを語ることは、容易ではなさそうである。

2 Aさんの語りに見る逡巡

ここで、今回分析対象としているAさんのインタビューをもとに、男性が語ることを考えてみたい。これまで述べているようにAさんは、自分の世界と子どもの世界がひとつになるような体験を含め、自身の生の体験を、インタビュー中に表現してくださっている。こうした体験は、曰く言い難いものであり、言葉にはしにくいものであろう。男性が得意とする理路整然としたプレゼンテーションとは対極にある「語り」である。それをAさんはかなり苦しみながらもやってくださっている。以下に例を挙げる。

(子どもが電車の脱線事故のニュースを集中して見ており、内容をよく把握していることに対して)

「不思議といや不思議なんですけど、やっぱり」

「そんな、なんんかちょっと分からないですけど(後略)」
(脱線事故の後の子どもの心境の変化について)

「(前略) まあまああれなんですけどね。それで様子が変わったところにはあれなんですけどね」

言葉で表現することに、非常な困難を感じつつも、自分の感じたことを何とか絞り出していることが伝わってくる。後者の「まあまああれなんですけどね。(中略) 特にはあれなんですけどね」などは、指示語「あれ」が指し示すものすら前後に示されているわけでもなく、ほとんど何を言っているのかわからない、それこそこれが会社のプレゼンであれば笑われるような発言であるが、Aさんがリアルタイムで何かを思いだし、感じ、表現しようとしていることがわかる。

Aさんのインタビューで、注目したい言葉がひとつある。それが「けど」である。「○○と想っているんですけど」等、文末、あるいは文末に来る逆接の「けど」が非常に多い。一時間強のインタビュー中、実に一五〇回もの「けど」がAさんの発言には登場するのである。Aさんの口癖でもあるのかもしれないが、これだけ多用するということは、この「けど」が、Aさんの内面にインタビュー中起こっていたことを示しているとは考えられないだろうか。本来「けど」は接続語であり、その後

には何か言葉が続くはずであるが、Aさんの「けど」は文末に使われることも多い。「○○と思います」と言えば済むところを「○○と想うんですけど」とするような使われ方が多いのである。これは、男性が悩みを語る時にも共通する特徴であると思われるが、一体どういうことなのであろうか。

ひとつ考えられるのは、男性が自分の個人的な体験や感情を語る時のためらいが、ここに表れているということである。「自分はこう思う！」と言い切るのではなく「自分はこう思うけど(はつきりしなくてすみません)」「自分はこう思うけど(社会的には認められないかもしれないです)」「自分はこう思うけど(間違っていたら修正します)」等々、後ろに何かモゴモゴと、言葉にはしないつぶやきをくつつけておかないと、不安で出せないのではないだろうか。Aさんの「けど」は、自分の内面を表現しようかしまいか、うまく言葉では言えないけれどもどうしようか、こんな状態でもとりあえず発言してもいいだろうか、これは大学が行っている調査だし、いい加減なことは言うべきではないのに……といった逡巡の結果なのではないだろうか。

VII まとめ く父親インタビュー本調査に向けて

これまで見てきたように、父親は子育てにおいて、理路整然とした、男性になじみやすい世界とは異なる、言語化の難しい生の体験の世界をも体験できている。ところが、男性が子育てについて語ることは男性ならではの難しさがあると考えられる。われわれは、Aさんのように、逡巡しながらでも、そして

表現は必ずしも明確ではなくても、個人的体験を語って欲しいと思っている。しかし、評価されることへの恐れから、ともすれば男性は防衛的になる。あるいは、プライベートなことは価値がないという思いこみから、個人的体験はあまり語られない可能性もあるだろう。

冒頭で記した通り、今の社会には父親の子育てについて、周囲から押しつけられているようなところもある。また、世間には「男の子育てこうあるべし」「格好いい父親」といった情報があふれている。そのため、父親は、聞きかじりの情報を借りて子育てを画一的に語り、個人的体験は明かされないままインタビューが終わってしまうことも十分に考えられる。そうしたことを防ぎ、男性に「評価への警戒感」をなるべく抱かせず、リラックスして話してもらう仕掛けが必要であると考ええる。

そのために本調査では、予備調査と同じく甲南大学心理臨床カウンセリングルームの面接室を使用し、その空間で「具体的なエピソード」を語ってもらい、そこでどのような感情を味わったかを、なるべく引き出すように心がけることとした。画一的に、理路整然と「概念」を語りがちな男性に対して、できるだけ実際の体験を話してもらえたらと考えている。

註

(1) 東野充成『子ども観の社会学―子どもにまつわる法の立法過程分析―』
 大学教育出版、二〇〇八年。

(2) 鈴木洋ほか「ひよこバクラブ」、『ひよこクラブ』平成一九年七月号第一附録、二〇〇七年。

(3) 太田睦「男も育児休職」、新評論、一九九二年。

(4) 脇田能宏「育休父さん」の成長日記』朝日新聞社、二〇〇〇年。

(5) 山田正人「経産省の山田課長補佐だいたい育児休中」日本経済新聞社、二〇〇六年。

(6) 甲南大学子育て研究会編「子育て環境と子どもに対する意識調査2―父親版―報告書」文部科学省学術フロンティア共同研究プロジェクト、甲南大学学術フロンティア子育て研究会、二〇〇二年。

(7) 河合隼雄「ユング心理学入門」培風館、一九六七年、二一六頁。

(8) 濱田智崇、岡田尚子、福本寿々子「就学前の子どもの母親が配偶者に求めるもの(1)」「(2)―幼稚園児(保育所児)を持つ母親へのインタビューから見えるもの―」日本心理臨床学会第二七回大会研究発表、二〇〇八年九月。

(9) 濱田智崇「男性がこころに抱えるものをどう扱うか」『暴力の発生と連鎖』二六一―五六頁、上村くにこ編、人文書院、二〇〇八年参照。

(10) 濱田智崇 前掲書三〇―三二頁参照。

(しんどうけんいち・臨床心理学)
 (はまだともたか・臨床心理学)
 (かわぐちあきのり・臨床心理学)